

図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング授業の設計

桂 まに子

1. はじめに

平成24年度より導入された図書館司書課程の新カリキュラムは、「新しい図書館に対する展望を持ち、現状を積極的に改革できる人材」¹⁾の養成に力を入れている。図書館の館種の中でも公共図書館は特に地域に根差した図書館サービスを担っており、これからの図書館においては、地域の歴史・文化情報資源を活かしたサービスや、地域が直面している課題を解決するための情報サービスの充実が一層求められる。そのような図書館現場で求められる人材とは、当該地域に関する正確な知識を持ち、当該地域が掲げる行政課題に即した情報サービスを積極的に設計できる図書館員と言えるであろう。

大学の図書館司書課程科目は実務を学ぶための概論や演習で構成されている性質上、受講生の学習形態は知識習得型かつ受動的になりがちである。上述の「新しい図書館に対する展望を持ち、現状を積極的に改革できる人材」を輩出するには、受講生1人1人がこれからの図書館の役割やサービスについて能動的に思考する学習形態を作り出すことが重要であると考えられる。

そこで、京都女子大学図書館司書課程では、図書館実習を希望する受講生を多数含む図書館総合演習（選択科目）をアクティブ・ラーニングの手法で授業設計し、大学が所属する最も身近な地域である京都市東山区の歴史・文化や地域課題を受講生が自発的に学びなが

ら図書館の地域サービスを考える、東山「図書館と地域」プロジェクトの実践を試みた²⁾。本稿では、アクティブ・ラーニングの手法を組み込んだ図書館司書課程の授業設計について詳述し、その特徴と教育効果について考察する。

2. 大学教育とアクティブ・ラーニング

2. 1. 教育方法の改善

平成24年3月、文部科学省・中央教育審議会大学分科会大学教育部会は「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」を公表した。報告書のタイトルが目指すような人材を育てるには「大学教育の質的な転換」が必要であるとし、今後求められる教育のあり方の中にアクティブ・ラーニングがはっきりと明示されている。

求められる質の高い学士課程教育とは、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）によって、学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛える双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした教育である³⁾。

大学教育の新しい教育方法として登場した

アクティブ・ラーニングは現在、高等学校教育と初等中等教育の分野においても重要な教育方針の柱となりつつある。具体的には、平成26年11月に文部科学大臣が中央教育審議会に対して発した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」の中で「アクティブ・ラーニング」が用いられたのが契機である。これを受けて平成28年8月に発表された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、基本的な方向性の1つとして「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）がはっきり示されている⁴⁾。小学校は平成32年度、中学校は平成33年度からアクティブ・ラーニングを含めた新学習指導要領の完全実施が始まることとなる。

高等学校教育に関しては、平成26年12月に中央教育審議会より公表された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の答申の中でアクティブ・ラーニングについての言及がなされた。平成28年3月に発表された「高大接続システム改革会議 最終報告」にも、アクティブ・ラーニングによる授業改善の重要性が明確に述べられている。

資質・能力を総合的に育むためには、学びの質や深まりが重要であり、課題の発見・解決に向けて生徒が主体的・協働的に学ぶ、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を図ることが必要である⁵⁾。

2. 2. 大学教育におけるアクティブ・ラーニングの定義

アメリカの高等教育界で1980年代から盛んに用いられ、1990年代に入って定義・概念が確立したアクティブ・ラーニング (Active Learning)⁶⁾ が、20年近くを経て日本の教育界に持ち込まれ、教育改革の中核をなす学習理論として広がりを見せているのは確かである。改めて、日本の大学教育におけるアクティブ・ラーニングの定義を整理しておく。

文科省の定義によると、教員から学生に一方的に知識が伝達される座学中心の教育方法である「受動的学修」に対し、学生による主体的な学びを引き出す教育方法を「能動的学修 (アクティブ・ラーニング)」と呼ぶ。両者は切り離して行われるべきではなく、座学で得た知識をもとに、積極的に知識を活用していく学習環境を生み出そうとするのがアクティブ・ラーニングである。代表的な手法として、グループ・ディスカッションやディベート、グループワークを挙げている⁷⁾。

アクティブ・ラーニング (AL) を取り入れた教育改善により大きく変化するのは、従来の大学教育に多く見られた講義中心型の授業が「講義+AL型」⁸⁾ の授業へと設計し直されることであろう。例えば、京都女子大学においても平成29年度より全ての科目において授業形態の中にALの要素を取り入れることがシラバス作成の段階から求められている。具体的には、以下の8つの「京女AL (アクティブ・ラーニング) 区分」を設け、全授業回数の半数以上でALを実施する授業設計を行う仕組みである⁹⁾。

- ①振り返り (ミニテスト・レポート等)
- ②対話型授業 (質疑応答時間の確保、クリッ

- カー等を使用した授業)
- ③授業時間外学習（課題シート・e-ラーニング等）
- ④グループ学習 協調学習／協同学習（PBLを取り入れた授業・ブレインストーミング）
- ⑤ディスカッション／ディベート（ケーススタディ／ロールプレイング等を含む）
- ⑥プレゼンテーション／課題発表（資料作成に留まらず、学生に発表を課す）
- ⑦フィールドワーク（教室を離れて体験学習や社会調査等を行う）
- ⑧実験・実習・実技（実験・実習・実技科目）

2. 3. アクティブ・ラーニングによる授業設計

ここで留意すべきは、アクティブ・ラーニングを用いた教育改善とは、単に教員による講義中心の授業形態を学生主体の学習形態へと変換すればそれで良いというわけではない点である。授業中にグループワークやディスカッションを行うための事前準備と、グループワークなどによって学んだ成果をさらなる主体的な学びへと結びつける事後展開の両方がある初めてアクティブ・ラーニングは成立する。

平成24年度の中教審報告においても、次の3つのステップを適切かつ有効に組み合わせることで授業設計を行うことが望ましいとされている。

- ・事前の準備…資料の下調べや読書、思考、学生同士の議論。
- ・授業の受講…教員の直接指導、その中で教員と学生、学生同士の対話や意思疎通。

- ・事後の展開…授業内容の確認や理解の深化のための探究、さらなる討論や対話。インターンシップやサービス・ラーニング¹⁰⁾などの体験活動。

先に挙げた8つの京女AL区分は「授業の受講」に含まれる内容であり、「事前の準備」と「事後の展開」をトータルに取り込んだアクティブ・ラーニングまでにはいたっていない。特に、事後の展開に関しては教育分野ごとに目指す先が異なることが推察される。アクティブ・ラーニングを活用した教育実践を成功させるには、まずは各教員が3つのステップの重要性を意識しながら分野に合わせた授業設計をしていくことになるであろう。

また、大学教育改革の流れに沿う形で、日本の大学図書館の環境整備が急速に進められている点にも触れておきたい。リノベーションや新規建築をする大学図書館の多くは館内に「ラーニング・コモンズ」という新しい学習空間を確保する傾向にあり、学生同士でディスカッションやグループワークを行うのに適した場づくりがなされている。アクティブ・ラーニングとラーニング・コモンズは名称も似ており相性は良いはずなのだが、学生にコモンズを積極的に活用させるアクティブ・ラーニングの授業設計を行っている教員はまだ少ないのが現状である。

その点、図書館司書課程は学びの対象自体が図書館である。ラーニング・コモンズの有無に関わらず、様々な教育分野でアクティブ・ラーニングが円滑に行われるには、図書館が有する資料・情報と新しい学習空間をどのように活かすべきか理論面および実践面から探究する 때가来ている。

各種教育分野のアクティブ・ラーニングと図書館活用という研究関心は今後さらに深めることとし、本研究では、まずは図書館員を養成する図書館司書課程という特殊な教育分野におけるアクティブ・ラーニングの設計を試みる。先行研究には「児童サービス論」でアクティブ・ラーニングを取り入れたものがあるが¹¹⁾、本稿は「図書館総合演習」を対象とし、先に紹介したアクティブ・ラーニングの3ステップ（事前の準備・授業の受講・事後の展開）と情報リテラシーの4ステップ（収集・整理・編集・発信）を融合させたプロジェクト型授業として設計した。

3. 東山「図書館と地域」プロジェクト

3. 1. 概要

平成27年度後期（9月～1月）の図書館総合演習の中で、東山「図書館と地域」プロジェクトとしてアクティブ・ラーニングを実施した。図書館総合演習は選択科目ではあるが、図書館実習を希望する学生は必修の科目としている。そのため、平成27年度の授業目標を次のように定めた。受講生1人1人が「図書館と地域」という視点で地域の図書館や当該地域の課題について調査し、既存の図書館サービスを地域性に即したサービスへと変革させるために何ができるか話し合いながら、図書館の新しいサービスを提案することを目指す。

具体的な地域は京都市東山区を対象とし、東山図書館が力を入れている既存サービス「東山文学作品リスト」(136冊)¹²⁾をベースに、登場するエリアと作品を活用しながら東山の歴史や魅力、地域課題を伝える冊子『本から始める東山 京女生×地域×観光』を授業の中で制作した。

平成27年度の受講生は15名であった。受講生には学期初めにアクティブ・ラーニングの説明をしたが、学期中にその名称を用いることはしなかった。1つのプロジェクトに取り組むことで自ずと主体的な学習が生まれる授業に設計した点が大きな特徴である。

冊子編集は3つのグループで分担し、東山区の3つのエリア（八坂、六波羅、清水）をゆかりの文学作品（計13作品）と合わせて紹介する内容となった。各エリアのテーマタイトルと編集内容の特徴は以下の通りである。

エリア1 八坂界限 (Appendix 1-1、1-2)

「八坂観光の裏にある中学校の謎」

→ 地域課題をデータで紐解く

エリア2 六波羅界限 (Appendix 2)

「東山×平安時代」

→ 文献をもとに地域の歴史を掘り下げる

エリア3 清水界限 (Appendix 3-1、3-2)

「歩いて・観て・食べよう 清水文学紀行」

→ 地域の今を紹介するガイドブック風、
地域の人にインタビュー

3. 2. アクティブ・ラーニングの要素

平成27年度図書館総合演習は表1のように設計した。受講生による主体的な学びを引き出すアクティブ・ラーニングとなるように、学習プロセスが受講生自身にも見えやすい情報リテラシーのステップ（収集・整理・編集・発信）を組み込んだ。文学作品を読んで地域を歩いたり調査したりするテーマであるため、学習環境が学内の教室に留まらず、図書館や地域など学外へも広がっている点にも注目してほしい。

9月	東山図書館の既存サービスおよび東山区の特徴について学ぶ（教室） 「東山文学作品リスト」より読みたい作品を選び、読む 選んだ作品をもとに、3つのエリアに分かれてグループを作る（教室）
10月	選んだ作品の作家について調べる（教室、大学図書館、公共図書館） 作品に登場するエリアの地域性（歴史、文化、課題）について調べる（教室、図書館） 調べた内容を持ち寄り、グループ内でディスカッション（教室） 作品・作家紹介およびエリアについて調べたことをグループ内で発表する（教室） まち歩きの前準備をする（授業外学習）
11月	現地でインタビューしたい人やお店などを決めてアポイントを取る（授業外学習） まち歩き、インタビューの実施（東山区） 写真やパンフレット、インタビュー内容など、収集した地域情報の整理（教室）
12月	作品・作家と地域を紹介する冊子原稿の執筆（教室） グループ内で執筆内容の進捗報告およびディスカッション（教室）
1月	冊子完成前の最終報告会、冊子タイトルの決定（東山区役所会議室） 担当した原稿の推敲、冊子全体の見直し（教室、授業外学習）
2月	印刷

表1 平成27年度「図書館総合演習」授業設計

図書館総合演習におけるアクティブ・ラーニングの要素は次の5点である。アクティブ・ラーニングの3ステップに着目し、授業の受講だけではなく事前の準備と事後の展開に該当する要素を含めるように授業設計の段階から心がけた。

- ・受講生の能動的学習によって得られた知識の活用と応用を目指すプロジェクト学習である。
- ・個々の受講生が調べた内容を持ち寄り、受講生同士でディスカッションを行い、各エリアが現在直面している課題とは何であるかを自分たちで発見する。（事前の準備）
- ・大学図書館や公共図書館の地域資料、インターネット上の情報、図書館員や地域の人から得られた地域情報など、多様な種類の情報源を駆使して学習を進めていく。
- ・受講生は「図書館と地域」という共通の視

点を持って、図書館がサービスする地域の歴史や文化、現状について主体的に調べることにより、当該地域に関する知識および関心が深まる。

- ・学習成果である冊子はアクティブ・ラーニングの実質化に繋がる。（事後の展開）

3. 3. 期待される教育効果

アクティブ・ラーニングの手法がもたらす教育効果を事前に想定すると次の4点に集約された。

- ・学生個人の能動的な学習（文献調査、情報検索）と、学生間の積極的な協働（ディスカッション、インタビュー、まち歩き、冊子制作）により、体系的な学習を身につけることができる。
- ・プロジェクト演習を通して、大学生が身につけるべきアカデミック・スキル（情報の

収集・整理・編集・発信) が磨かれる。

- ・東山にちなんだ作品を読み、図書館の地域資料を用いて東山について調べ、実際に地域を歩いてみることにより、地域性に即した図書館サービスに対する自分の意見を持つようになる。
- ・授業で制作した冊子は、学生自身の学習成果であると同時にアクティブ・ラーニングを取り入れた教育実践を可視化した教育ツールでもある。次年度以降の図書館司書課程科目におけるアクティブ・ラーニングの教材として学生に還元することにより、能動的な学習方法を学びやすくする効果が期待される。

4. 『本から始める東山』制作過程

(アクティブ・ラーニングの流れ)

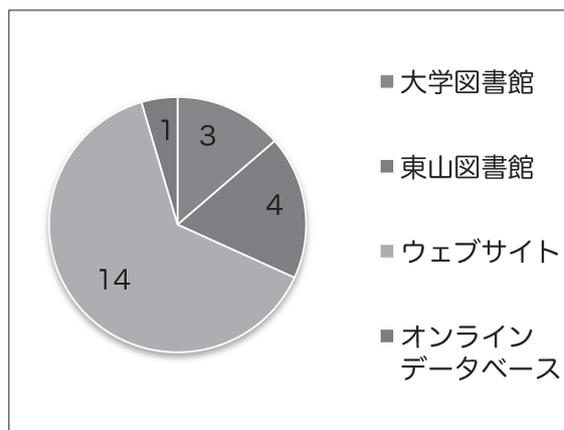
ここでは、情報リテラシーの4ステップごとに、学習内容の特徴と授業後に行った受講生へのアンケート結果をまとめる。

4. 1. ステップ1：情報の収集

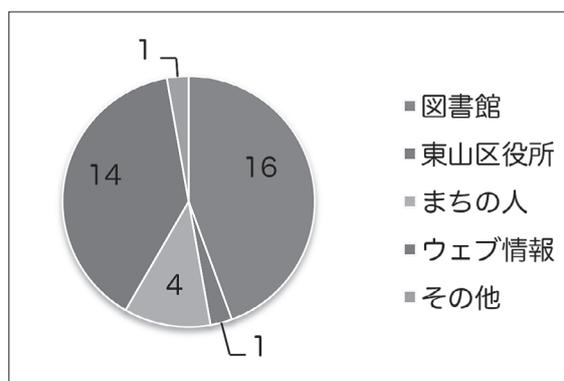
情報収集を丁寧に行うために、大学図書館や公共図書館の地域資料、インターネット上の情報、図書館員や地域の人から得られた地域情報など、多様な種類の情報源を駆使した(グラフ1、2参照)。

その他、以下の作業を行った。受講生が読了した東山文学作品および作中に登場する場所は、Appendix4を参照。

- ・東山図書館の既存サービスおよび東山区の特徴について学ぶ
- ・「東山文学作品リスト」より読みたい作品を選び、読む
- ・選んだ作品をもとに、3つのエリアに分か



グラフ1 作家・作品調査



グラフ2 エリア調査

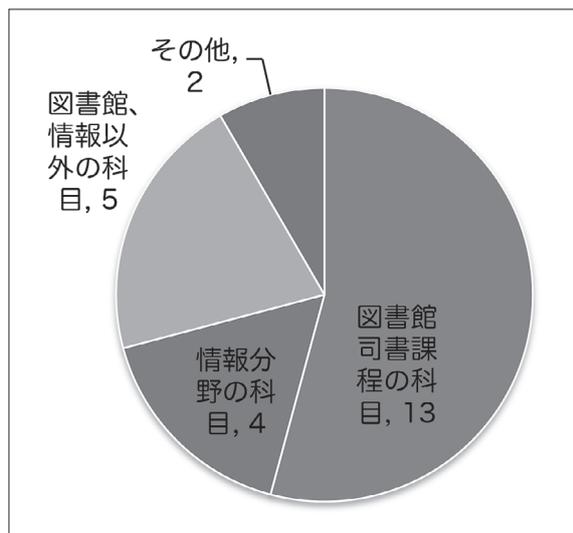
れてグループを作る

- ・選んだ作品・作家について調べる
- ・関連するエリアの地域性(歴史、文化、課題)について調べる
- ・まち歩き、インタビューの実施

4. 2. ステップ2：情報の整理

収集した情報を整理する際に、個人作業だけでなくグループ作業を取り入れた。ディスカッションをしながら情報の取捨選択することで、編集ポイントが見えやすくなる。

- ・調べた内容を持ち寄り、グループ内でディスカッション
- ・写真やパンフレット、インタビューなど、



グラフ 3 授業に役立った他の科目

収集した地域情報の整理

- ・参考文献・参考サイト一覧の作成（冊子の最後に掲載）

情報の集め方や整理の仕方、統計情報の扱い方、参考文献の書き方などは他の科目で身につけたスキルを活かしていることが分かった（グラフ 3 参照）。

- ・図書館司書課程の科目

情報サービス演習、図書館基礎特論、情報サービス論、図書館情報技術論、情報資源組織演習、情報メディアの活用、生涯学習概論

- ・情報分野の科目

情報リテラシー基礎・応用、情報コミュニケーション

- ・それ以外の科目

視聴覚教育メディア論、日本史、歴史地理学、心理学、犯罪社会学

4. 3. ステップ 3：情報の編集

冊子原稿の執筆は、PowerPointを使って

行った。ステップ 2 と同様、担当エリアのページ構成や執筆内容についてグループ内で話し合う時間を取るようにした。

- ・作品と地域を紹介する冊子原稿の執筆
- ・グループ内で執筆内容の進捗報告およびディスカッション
- ・担当した原稿の推敲、冊子全体の見直し

授業後のアンケートによると、グループ・ディスカッションへの参加度合いは、積極的に参加して発言した（9名）、必要に応じ参加・発言した（1名）、参加したがあまり発言できなかった（5名）という結果となった。

積極的なディスカッションができたグループは少人数だった（4名）こともあり、誰かが一方的に主張することなく、バランスよく話せていた。役割分担が上手くでき、何をすべきか全員が把握して互いの進捗も把握できていた。

一方、積極的なディスカッションが難しかったグループはそもそもの人数が多かった（6名）。話したいことをどのようにまとめるか苦労した、人と話し合って協力して物事を進めていくのが苦手という意見があった。その他、積極的に発言する人が少なかったので進行役が必要だったが、進行役が決まるとその人に頼りきりになってしまったという反省も見られた。

4. 4. ステップ 4：情報の発信

ステップ 1 から 3 までの成果を授業内だけでプレゼンテーションするやり方はどの教育分野の授業でも行われている。ただし、これは極めて内部的でインフォーマルな情報発信であると言えよう。今回のプロジェクトは、

地域の図書館を想定して地域サービスを提案するという性質上、地域の情報を正確かつ分かりやすく伝えることに重点を置いた外部的でオフィシャルな情報発信となった。

- ・冊子完成前の最終報告会
- ・冊子タイトルの決定
- ・印刷、完成

アンケートで受講生たちに冊子制作のプロセスを振り返ってもらったところ、内輪の発表ではない外部を意識した情報発信の難しさをプロジェクト終盤にかけて感じていたことが分かった。

- ・レポートのように文字ばかりの堅苦しいものにならないように心がけた。
- ・自分が見る側になった場合を考え、どんな人でも親しみを持って見てもらえるように説明文はやわらかく、少しでも感じた感じにするよう意識しながら作成した。
- ・冊子を手にとった人が見やすいように、デザインやフォントの統一をするのに苦労した。

5. 得られた教育効果

5. 1. アクティブ・ラーニング

学生個人の能動的な学習（文献調査、情報検索）と、学生間の積極的な協働（グループ・ディスカッション、地域の人へのインタビュー、文学まち歩き、冊子制作）により、「図書館と地域」をテーマにした体系的な学習をクラス全体で進めることができた。

これは授業実践前に想定していた範疇であったが、実践を経てより具体的に見えてきたのが「座学で得た知識をもとに、積極的に

知識を活用していく学習環境を生み出そうとする」アクティブ・ラーニングである。ステップ2（情報の整理）でグラフ3「授業に役立った他の科目」が示したように、情報の集め方や整理の仕方、統計情報の扱い方、参考文献の書き方などに他の科目で身につけたスキルを活かしていた。座学で学んだ知識を用いるようにと教員が直接指導したわけではなかったため、学生自身がこれまでに蓄積してきた学びを自然に発揮できる学習環境を作り出すことに成功したと言える。

成功事例がある一方で、ステップ3（情報の編集）では、アクティブ・ラーニングに欠かせないグループワークやグループ・ディスカッションの難しさが浮き彫りになった。グループの人数やディスカッションの進め方には改善余地があるものの、学生同士が意見を出し合い、互いの主張をぶつけながら解決策や提案を導き出すプロセスは、結果として能動的な学習を促すこととなった。事実、グループワークの成果はアンケート結果にも以下のように表れている。

- ・手に取ってもらいやすい冊子にするにはどうするか、たくさん話し合った。例えば、デザインを京都らしくし、女性が好みやすいイメージを心がけた。
- ・背景の色合いや文章の見せ方など、グループ内でそれぞれに違いが見られたが、お互いの良いところを認め合って譲り合い、ページを作成することができた。

5. 2. アカデミック・スキル

図書館総合演習のプロジェクト学習を通じて、受講生15名全員が「情報を収集・整理・編集・発信する力」を伸ばすことができた

(実感度100%：アンケート結果より)。スキルアップの度合いが大きかったのは、ステップ1（情報の収集）とステップ2（情報の整理）であった。情報検索のスキルを駆使して関連情報は豊富に集まったが、冊子の限られたページ上に全て載せることは不可能である。アンケート回答にもあるように、有用な情報を選択するためには根拠が必要となる。

- ・集めた情報量が多いため、いかに削っていくか悩んだ。情報を取捨選択し、ページに何を載せていけば良いか考えさせられた。

ステップ1の情報収集では必ず情報源の書誌情報やサイト情報を控えるようにし、ステップ2の情報整理で各自の参考文献・参考サイト一覧を作成した。最終的には、制作冊子の最後に「参考文献・参考サイト」のページを作り、エリアごとに出典を明記して根拠を提示した。

このように情報リテラシーのステップをアクティブ・ラーニングに融合させて授業設計を行うと、学びのプロセスが明確となり、学生自身もスキルアップを実感できる。

5. 3. 教育実践の可視化

図書館総合演習のプロジェクトで制作された地元の文学作品とまち情報を合わせたガイドブックは、これからの地域の図書館が地域情報を図書館自身で編集し、発信していくことを提案した学習成果物である。さらに、この冊子自体もアクティブ・ラーニングを取り入れた教育実践を可視化した教育ツールとなりうる。

この点は、事後の展開を意識したアクティブ・ラーニング設計とも関連する。大学の教育改善で求められているのは、アクティブ・

ラーニングの実質化である。新しい教育手法を授業の中で取り入れればそれで良いというわけではなく、教員の側も授業成果が形となって残るような授業設計を行い、事後の展開へと繋げていくことが望ましいと考える。

本プロジェクトの場合の事後展開は、完成した冊子が図書館司書課程のアクティブ・ラーニング教材として次の受講生たちへと引き継がれていく点にある。また、大学教育の現場で学生たちによって編集された冊子であっても、内容が京都のことであれば、それは図書館の新しい地域資料となる。完成した冊子『本から始める東山 京女生×地域×観光』を京都市や京都府の図書館に寄贈すると、学びの成果が地域へ還元されていく。

6. おわりに

京都女子大学図書館司書課程の科目「図書館総合演習」において、情報リテラシーの4ステップ（収集・整理・編集・発信）を組み込んだアクティブ・ラーニングの授業設計を行った結果、事前の準備・授業の受講・事後の展開の3ステップを欠くことなく体系的に学習を進めることができた。

このプロセスを講義中心の科目で同様に行うことは現実的ではないが、演習科目や専門科目にあっては、情報リテラシーを身につけながら分野ごとの特徴を活かした学習成果を生み出すアクティブ・ラーニング授業の設計は比較的容易ではないであろうか。今後は、他分野でも応用可能なアクティブ・ラーニングの教育プログラムを開発することを視野に入れながら、理論面および実践面から大学教育におけるアクティブ・ラーニング授業の設計手法と教育効果についての考察をさらに深めていきたい。

引用文献・注

- 1) これからの図書館の在り方検討協力者会議「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について (報告)」文部科学省、2009、p. 2.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2009/09/16/1243331_2.pdf (2016-12-1参照).
- 2) 平成27年度「京都女子大学 特色ある教育プログラム」として採択された。事業報告として、第21回FDフォーラム (京都外国語大学、平成28年3月6日) にてポスター発表「東山『図書館と地域』プロジェクト：京都女子大学図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング実践」を行った。
- 3) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ)」文部科学省、2012、p. 4.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/04/02/1319185_1.pdf (2016-12-1参照)
- 4) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ (第1部)」文部科学省、2016、p. 23.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf (2016-12-1参照)
- 5) 高大接続システム改革会議「高大接続システム改革会議 最終報告」文部科学省、2016、p. 14.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf (2016-12-1参照)
- 6) 「active learning」という用語が初めて用いられたのは、アメリカの国立教育研究所 (National Institute of Education) がまとめたレポート「Study Group on the Conditions of Excellence in American Higher Education」(1984) においてである。
- 7) アクティブ・ラーニングとは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」(「用語集」『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)』中央教育審議会、文部科学省、2012、p. 37)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2016-12-1参照)
- 8) 教師主導ではあるが、講義だけでなく、学生の書く・話す・発表するなどの活動もあるアクティブ・ラーニング型の授業を指す。(溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014)
- 9) 京都女子大学「平成29年度シラバス作成要領」p. 9.
- 10) サービス・ラーニングとは「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」(「用語集」『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)』中央教育審議会、文部科学省、2012、p. 38)
- 11) 平井尊士、設樂馨「2014年度図書館におけるアクティブ・ラーニングの試み—教育環境整備と司書課程の取組—」『武庫川女子大学情報教育研究センター紀要』No. 23、2014、pp. 10-9.
 坂下直子「児童サービス論におけるアクティブラーニング：グループワークと全員参加型のルーブリックによるパフォーマンス評価」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』京都女子大学図書館司書課程研究室、No. 3、2016、pp. 135-146.
- 12) 京都市東山図書館が作成した「京ひがしやま文学散歩 2016年版」は作品数がさらに増え、作中に東山が登場する148作品 (一般書137作品、児童書11作品) が紹介されている。冊子は館内で入手できるが、図書館のホームページから作品リストと場所別索引 (PDF) をダウンロードすることもできる。
http://www2.kyotocitylib.jp/?page_id=161 (2016-12-1参照)

Appendix 1-1 エリア1 八坂界限「八坂観光の裏にある中学校の謎」

7

❁ 消えた祇園の中学校 そこからわかる今の日本 ❁



❁ 工事現場発見！

『いつか、僕らの途中で』の登場箇所をめぐって八坂神社付近を歩いていると、大きな工事現場がありました。

「漢字博物館・図書館」と書かれています。どんな建物ができるのでしょうか？

？

❁ ここには何が？

国立国会図書館「カレントアウェアネス・ポータル」で、この漢字博物館・図書館に関する記事を見つけました。（「日本漢字能力検定協会、京都市の元弥栄中学校跡地に「漢字博物館・図書館」を建設：2016年に開館予定）2014年5月1日）国内初となる漢字を中心とした博物館であり、図書館には漢字に関する書籍が置かれるようです。しかし、記事名にある通り、ここには「京都市立弥栄中学校」がありました。ここに通っていた子供たちはどこへ行ってしまったのでしょうか？

❁ 弥栄中学校と開晴中学校

弥栄中学校のHPを見てみると、「開晴中学校に統合されました」と書かれています。生徒は「開晴中学校」に移動したようですね。では、開晴中学校とはどんな学校なのでしょう？



？

❁ 開晴中学校とは？

開晴中学校HPによると、「白川・新道・六原・清水・東山小学校及び弥栄・洛東中学校の児童・生徒数の減少を踏まえ、子どもたちのより良い教育環境の実現を図るため、平成19年8月、地元8学区（有濟・粟田・弥栄・新道・六原・清水・貞教・修道）から、7小中学校を統合」されたとあります。

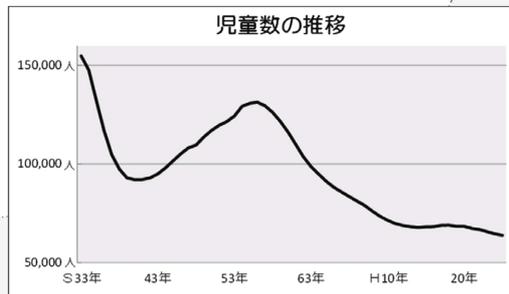
7校の小中学校が統合されてできたのが、開晴小学校・中学校のようですね。訪れてみると、とても大きな学校でした！しかし、7校もの小中学校が廃校とは、京都市内ではそんなに児童が減っているのでしょうか？（上の写真は開晴小学校・中学校外観）

では、現在の京都市の児童数を見ていきましょう！

Appendix 1-2 エリア1 八坂界限「八坂観光の裏にある中学校の謎」

✿ 京都市の児童数はどう変わったの？

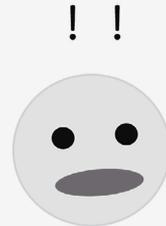
京都市教育委員会のHPに、学校統廃合について書かれているページがあります。それによると、「京都市では、昭和33年度には約15万人の児童が小学校に在籍していましたが、昭和60年代初頭にはその約67%となる約10万人にまで減少しました。特に、都心部の上京区・中京区・下京区では約4分の1に減少し、小学校の大半が小規模校（学級数が6～11学級）となりました」とあります。グラフでも、児童数が大きく減少してしまっていることが分かりますね。この児童数減少に伴い、京都市教育委員会は市内の学校の統廃合を行いました。その結果、もともと68校あった小中学校は17校になりました。大規模な統廃合が行われたのは東山区だけではなくたのです。児童数が大きく減少したために統廃合が行われたことが分かりましたね。では、この児童数の減少は京都市内だけで起きている問題なのでしょうか？



京都市教育委員会HPより (H27.12.17閲覧) → <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000110862.html>

✿ 日本全体での児童数は？

日本全体での人口統計が、総務省統計局に掲載されていました。(下グラフ) 今回取り上げた、小中学生にあたる14歳までの児童は日本全国で約1年の間に、14万6千人も減少していることがわかります。児童が減っているのは京都市だけでなく、全国的な問題です。ただし、児童だけでなく、全体的な日本の人口も減少していることも見えてきます。



平成27年6月1日現在 (確定値)

<総人口>

1億2692万9千人 前年同月に比べ減少
▲18万3千人 (▲0.14%)

・ 0～14歳人口

1613万9千人 前年同月に比べ減少
▲14万6千人 (▲0.90%)

・ 15～64歳人口

7718万4千人 前年同月に比べ減少
▲99万3千人 (▲1.27%)

・ 65歳以上人口

3360万6千人 前年同月に比べ増加
95万6千人 (2.93%)

<日本人人口>

1億2520万8千人 前年同月に比べ減少
▲27万3千人 (▲0.22%)



← ↑ 総務省統計局 人口推計
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.htm>
(H27.12.3閲覧)

✿ 児童が減ることで学校が統廃合され、人口の変化に伴い街並みは変化していきます ✿
今から10年後の祇園そして日本の姿は、果たしてどうなっているのでしょうか？

Appendix 2 エリア2 六波羅界限「東山×平安時代」

② 六波羅蜜寺

『葛野盛衰記』（森谷明子、講談社、2009）

＜歴史小説＞ 平安京遷都前から物語は始まり、多治比の姫、藤原の者、帝の皇女そして平家一門が語る平安京を巡る一大叙事詩。第二部「六波羅」は清盛の継母・宗子と異母弟・頼盛によって平家の栄達と滅亡、変わらずに在りつづける都の姿が語られる。

○平家との深い因縁

「六波羅」といえば、平清盛をはじめとする平家が本拠を置いた場所です。平安京五条大路（現在の松原通）を洛外に伸ばした五条末から同じく六条大路を伸ばした六条末辺りまでが推定され、祖父・正盛が阿弥陀堂を建てたことをきっかけに、清盛の時代には一門、郎党の邸が密集していました。このようなことはそれまでなかったことでした。平家の面影は地名にも残っていて現在も「門脇町」「泉町（現・三盛町）」などがあります。

他に地理的な理由もありました。鴨川を水濠、東山を巨大な壘壁とできたのです。そして清盛の嫡男・重盛の邸は、現在の馬町交差点付近にあったと考えられています。すぐそばを通る「苦集滅路（くずめじ。現在の渋谷通）」は山科へ抜ける間道で、この辺りは交通・軍事の要衝でした。清盛から平家を継ぎ、後白河院の近臣であった重盛がこの場所に邸を置いていたのは偶然ではなく、政治的、軍事的な理由があつたことだったのです。京都女子大学に程近い馬町はこの時代、重要なポイントでした。

六波羅は平家の発展に比例するように拡大していきました。

六波羅

平家・郎党が暮らした地域

- * 泉殿：清盛の邸、本邸
- * 池殿：清盛の継母・宗子とその実子（清盛の異母弟）頼盛の邸
平家拡大に伴い儀式等で泉殿が手狭だったため新たに作られた本邸泉殿より大きい（清盛の父の正妻たる宗子の存在もある）
- * 門脇殿：清盛の異母弟・教盛の邸
- * 常光院：元は、清盛の祖父・正盛が阿弥陀堂を建てていた場所
正盛堂、六波羅堂とも呼ばれていた
- * 小松殿：清盛の嫡男・重盛の邸

法住寺殿

後白河院の院御所



地図の作成にあたり、野口実先生の以下の文献を参照しました。
 「清盛・平家とその時代 第2章 清盛と京都①」（『京都民報』2012年2月12日）
 「平家の六波羅・西八条と院の法住寺殿」（『平清盛一王朝への挑戦（別冊太陽）』平凡社、2011）

小松殿は、現在の馬町交差点付近。渋谷越を登れば、京都女子大学のJ校舎があります。

○あの世とこの世の「境界」

平安時代の六波羅は「境界」でした。死者を葬る鳥辺野の入り口に位置するため、この世（平安京）・三途の川（鴨川）・境界（六波羅）・あの世（鳥辺野）というように考えられていました。

そんな六波羅界限は今でもそれらと結びついた行事があります。8月に六波羅蜜寺で行われる「萬燈会（まんとうえ）」がその1つです。火を灯した土器（かわらけ）を「大」の形に並べ先祖の精霊を迎える法要を営んでいます。鳥辺野という「あの世」から六波羅蜜寺などの境界を通して精霊は「この世」に戻り、盆が終わると大文字の火によって「あの世」へかえっていきます。

送り火である大文字は鳥辺野、蓮台野、化野という葬送の地に近い山で行われています。これは洛東の六波羅、洛西の蓮台野、化野が「六道の辻」という精霊の入口と考えられているためです。

清水寺

佳代のキッチン (原宏一、祥伝社、2010)

● 作品紹介

失踪した両親を捜すため、お客さんが持つてくる食材で料理を作る「移動調理屋」を始めた佳代。キッチンワゴンで両親ゆかりの地をめぐるうちに、一風変わった注文や、ちょっとした事件も舞い込んで…。すべての答えは美味しい料理の中にある？そして謎だらけの両親の行方とは？

● 作品に出てくる清水寺

「職場のおばちゃんたちとおしゃべりしながら平安神宮、清水寺(中略)といった神社仏閣の名所を観光バスでめぐった記憶があるが」
(p.101)

「清水寺の裏手に陶器を焼かせてくれる工房があるとか」(p.84)

清水寺付近の陶器屋さん (作品に登場したお店かも…!?)



清水焼窯元 森陶器館
東山区清水2丁目254
清水坂参道中程

こちらの陶器館では陶器を焼く体験ができます。ろくろを使った手ひねり体験や、陶器に絵を描く絵付け体験など。



かしようがま
茶陶窯元 嘉祥窯
京都市東山区清水
3-343



四代に渡り、茶道具や器を作り続けておられる窯元。こちらろくろを使う陶芸教室があります。

清水寺ってどんな寺？

● 清水寺が建てられたワケ

当時、滝を霊水として信仰する風習があり、さらに霊水に観音信仰が結びつき、お寺が建立されました。

● 「清水寺」の名前の由来

清：「祓へ給ひ清め給ふ」(『万葉集』)
「汚れを取り除く、身を清める」の意。
お寺にある「音羽の滝」にはこのような清い水が流れていると考えられたことから、「清水」という名前になったそうです。



周辺のおすすめスポット



Cafe & Lunch あさひ坂

東山区清水一丁目287-1
朝日堂茶わん坂店2F
9:30-17:00
(年中無休)
京都女子大から徒歩 20分

陶器屋さんの2階にある、隠れ家のようなお店。清水坂や五条坂のように人でごった返していない茶わん坂にあるので、ふらっと立ち寄ることができます♪

😊 編集の2人がお店のメニューを美食!

これぞ京都! な食材が満載 →
の和風口コモコでした(^O^)

京風口コモコ丼
(スープ付き)
¥950



← とろとろ和風あんかけと湯葉がめっちゃ合います!!

ゆば丼 (お漬物付き)
¥950

特別企画

東山区役所に聞く！ 東山区のまちづくりの推進や課題の解決を図るために 力を入れていることは？

私たちが通う京都女子大学は、清水寺や三十三間堂などの観光名所が数多く点在する東山区に属しています。そんな魅力あふれる東山区が登場する文学作品を読み、その作品の登場人物になりきって、登場人物が訪れたところに足を運んでみる。そして、さらなる魅力を発見する。この取り組みを通して、東山区についてもっと知りたいと思うようになりました。

そこで、東山区が行っている取り組みを知るために、東山区役所へインタビューしてきました！

☆ 現在行っている、東山区役所独自の取り組みには、どのようなものがありますか？

区役所独自の取り組みとしては、「東山区区民提案・共汗型まちづくり支援事業」が挙げられます。

☆ 「共汗」という言葉は聞き慣れませんが、どのような意味があるのでしょうか？

「共汗（きょうかん）」には、市民と区役所が共に汗を流し、お互いに協力することで、一緒にまちを盛り上げていこうという意味が込められています。

☆ 具体的にどのような取り組みがなされているのでしょうか？

共汗型事業としては、「東山区の魅力発信」「安心安全のまちの推進」「人づくりと地域の活性化」の三つがあり、ホームページやFacebookを使って観光情報を発信したり、警察と連携して高齢者や若い女性を狙った犯罪防止に努めています。また、区民の方とまちづくりについて一緒に考える、「まちづくりカフェ@東山」という取り組みも行っています。

区民提案型事業として今年度は、区全体で観光客を“おもてなし”しようと、事業者間のコミュニティー作りを手助けする「ユニバーサルツーリズムの推進プロジェクト」や、職人さんの技術を後世に残そうと、工房を巡るツアーの企画などを行う「手しごと職人のまち東山活性化プロジェクト」を、京都の大学と連携して行っています。

その他、東山区の課題解決や魅力向上に取り組む事業に助成金を交付する「まちづくり支援事業」も実施しています。

● 京都市東山区役所



区役所のホームページでも、「東山区区民提案・共汗型まちづくり支援行事」などについて知ることができます。

☆ 京都女子大学とも連携して、取り組みを行っているのでしょうか？

26年度は、生活福祉学科の方と共に、高齢者と地域を結びつけるためのサロンを開設し、運営を行ったり、買い物支援を行う「地域の見守り支援プロジェクト」や、生活造形学科の方と「空き家の活用促進プロジェクト」として、空き家の実態調査を行いました。

京都女子大学も東山区のまちづくりに協力しているんですね！

☆ 今一番、京女生に知ってもらいたい取り組みは何でしょうか？

京都女子大学に通っている学生の方は、東山区以外から来た方も多く、東山区についてまだよく知らないという方もいらっしゃると思います。そういった方に、東山区の魅力を発信していきたいです。

先ほど紹介した「まちづくりカフェ@東山」に参加される方は、東山が大好きな方はもちろん、まちづくりに興味がある方、東山についてもっと知りたい方におすすめの取り組みです。学生のみなさんの参加も大歓迎ですので、ぜひ参加してみてください！

私たちが東山区の魅力をもっともっと知っていききたいと思います。本日はありがとうございました！

(2015.11.26 インタビュー)



今回インタビューにご協力くださいました、地域力推進室・企画担当の萩原孝太さんです。萩原さんがおすすめする事業は、松原通りの活性化を目的とし、まちづくり支援事業の1つとして行われている「松原通元気市」です！

⇒ 14ページ（六波羅界限）参照

Appendix 4 受講生が読了した東山文学作品および作中に登場する場所

エリア1 八坂界限

作 品 名	作中に登場する場所
『エトランゼのすべて』 森田季節・著、庭・イラスト、星海社、2011	八坂神社周辺
『左京区七夕通東入ル』 瀧羽麻子、小学館、2009	祇園、花見小路
『いつか、僕らの途中で』 柴崎友香、田雑芳一・著、田雑芳一・絵、ポプラ社、2006	祇園、八坂の塔、四条大橋

エリア2 六波羅界限

作 品 名	作中に登場する場所
『冥界伝説・たかむらの井戸』 たつみや章、あかね書房、2003	六道珍皇寺、冥界通いの井戸
『鬼の橋』 伊藤遊、福音館書店、1998	六道珍皇寺、旧五条橋（現松原橋）
「水翁よ」（『京都宵』） 赤江瀑、光文社、2008	六道珍皇寺、六道の辻
『有頂天家族』 森見登美彦、幻冬舎、2007	六道珍皇寺、井戸
『からくさ図書館来客簿～名官・小野篁と優しい道なしたち』 仲町六絵、KADOKAWA、2013	六道珍皇寺、小野篁
『葛野盛衰記』 森谷明子、講談社、2009	六波羅蜜寺
『零崎人識の人間関係 戯言使いとの関係』 西尾維新、講談社文庫、2014	五条大橋

エリア3 清水界限

作 品 名	作中に登場する場所
『佳代のキッチン』 原宏一、祥伝社、2010	清水寺
『ポンチョに夜明けの風はらませて』 早見和真、祥伝社、2013	地主神社
『相棒』 五十嵐貴久、PHP研究所出版、2010	高台寺・月真院
「磯野家も真っ青の京都観光ガイド」（『しをんのしおり』） 三浦しをん、新潮社、2002	三十三間堂、清水寺